

西大寺旧境内出土木材

—第521次

1 はじめに

2014年におこなわれた西大寺旧境内の発掘調査（平城第521次）において、西大寺創建以前の整地層落ち込みSX1135より、建築部材未成品と思われるものを含む木材が4点出土した。調査地は平城京右京一条三坊九坪内にあたり、西大寺金堂院東面回廊SC1120を確認している。SX1135は金堂院東面回廊造成土の下層で確認された大規模な落ち込みで、金堂院造営以前にこれを埋め立て、整地がおこなわれた（『紀要 2014』）。SX1135から出土した木材は報告段階では未調査であったが、このたび調査を終えたので報告したい¹⁾。

2 出土木材

木材1 全長1225mm、幅185mm、成220mm。芯持ちで、部材の形状より肘木の未成品とみられる。これに木口から別材の小径丸杭が打ち込まれている。樹種はツガ属、杭がコナラ属アカガシ亜属。側面（出土時上面）はもともと平滑に加工されているが、加工痕跡は不明瞭で工具は不明である。下端は全面チョウナ（もしくはノミ）痕跡が残る。加工痕跡は明瞭で、刃幅55mm程度の直刃で、間隔は15～30mmと比較的細かく、3列平行に規則正しく加工された痕跡が残る。上端は割れ肌で、中央に部分的にチョウナはつりの痕跡が残る。チョウナの刃幅や加工の荒さが下端とは異なる。両木口とも仕上がりは平滑で、ノミの痕跡が残る。杭は径60mmで、木口に面取りを施す。反対の木口には貫通せず、打ち込まれた長さは1m程度とみられる。

古代建築の技法・様式の変遷において、肘木の形態のうち注目すべき特徴として、①下端の曲線、②笹繰の有無、③舌の有無、④木口の切断方法（下角を外へ出すものと垂直に切り落とすもの）があげられる²⁾。木材1は、①下端の曲線は、中心から両木口に向かって大きな弧を描く。②笹繰の有無は、上端が破損しているため不明である。③舌は現状では無い。下端は加工の途中段階ではあるが、この状態から舌を造り出したとも考えにくい。④木口の切断方法は、木口が一部しか残存せず判断は難し

いが、下角を外へ出すものとみられる。この④の特徴は、現存する古代建築では法隆寺経蔵（8世紀初期）にみられるものがもっとも新しいものである。これらの特徴をあわせると、木材1は古代の肘木としてはやや古い様相を示すとみることできる。しかし、部材は未成品でありかつ破損が大きいと、全体が不明で断定は難しい。

木材2 全長607mm、幅367mm、成215mm。芯持ちで、長方形断面部材の端材とみられる。樹種はヒノキ属。上下面・両側面ともチョウナで平坦に仕上げる。元口は刃幅90mm程度のチョウナ（またはノミ）で四角錐状に荒くはつる。

木材3 全長2615mm、径280mm。芯持ちの丸太材。節が多い。樹種はヒノキ属。末口側にエツリ穴を3方向からノミで開け、木口に面取りを施す。元口側の木口にはノコで切断した痕跡が残る。側面にはヨキの刃痕と割れ肌が入り混じり、非常に荒くはつたとみられる。

木材4 全長1630mm、径300mm。芯持ちの丸太材。樹種はヒノキ属。元口側にエツリ穴を3方向からノミで開ける。末口側は3面からなる尖った形状。側面とも、やや荒いチョウナ痕跡が残る。

3 まとめ

SX1135から出土した木材4点はいずれも建築に用いられた痕跡はみられないが、部材の未成品1点、端材1点が含まれ、近くで木材加工をおこなっていた可能性が考えられる。このうち木材9556は肘木の未成品で、奈良時代前期の特徴がみられる。これらの木材はSX1135の時期から、西大寺創建以前の建物に関わるものとみられ、その時期にも肘木を用いる建物が周辺でつくられていた可能性を示唆する。また、調査地の100m南西でおこなわれた平城第505次調査でも西大寺創建以前の遺構が3時期確認されている。これらの成果は西大寺創建以前の土地利用について重要な示唆を与えるものであり、今後、旧境内域では下層遺構についても慎重な調査をおこなう必要がある。

（番 光・小田裕樹）

註

1) 各木材の樹種同定は埋文センター星野安治による。なお年輪年代調査も試みたものの、年代が判明した資料はなかった。

2) 奈文研『山田寺出土建築部材集成』1995、42頁。

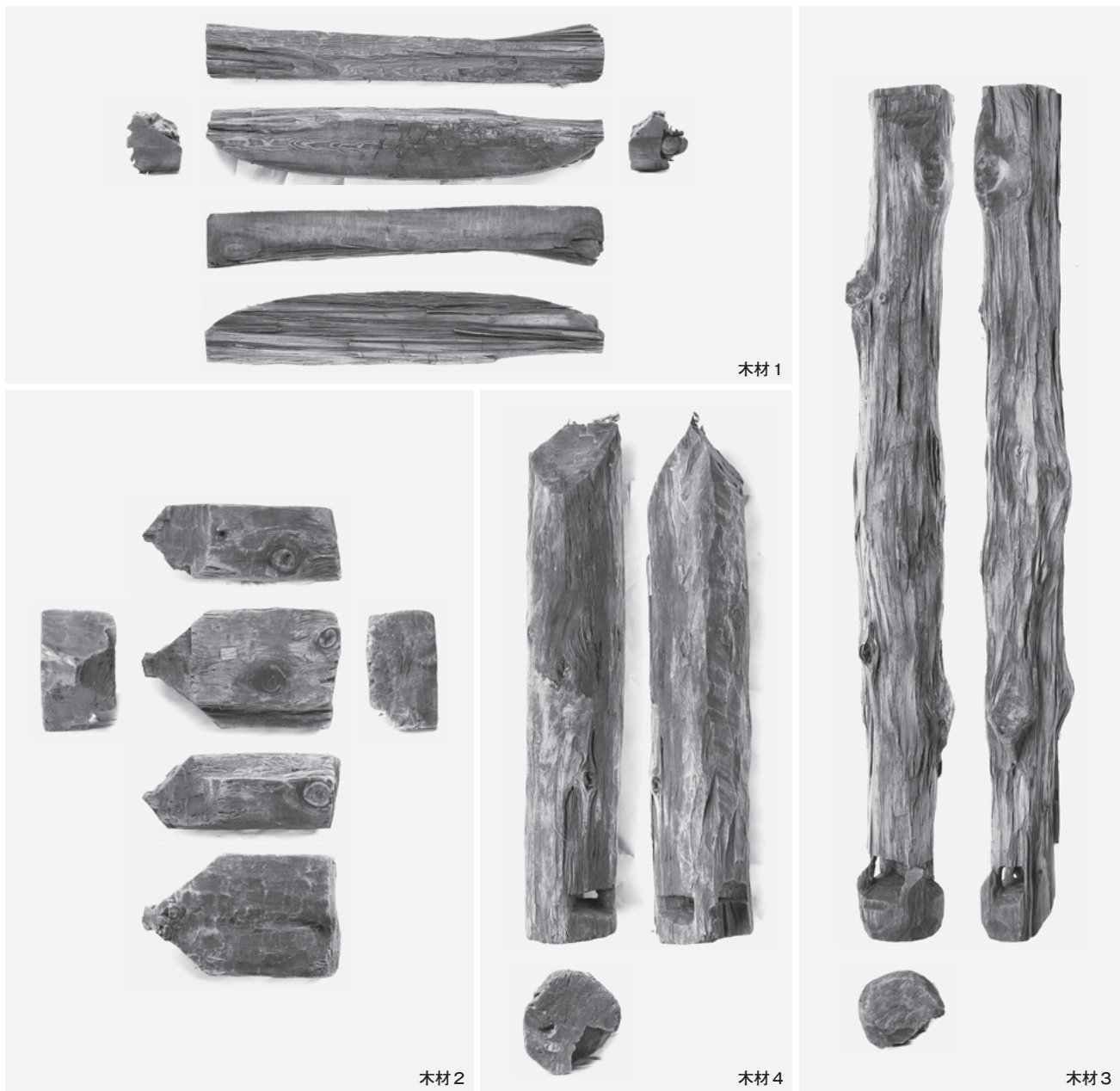


図329 第521次調査出土木材 1 : 20



木材1 木口に打ち込まれた小杭

木材1 下端チョウナ痕跡

木材4 側面ヨキはつり痕跡

図330 木材1・4細部写真